

# 教職員を対象とした自殺予防研修の報告

高田 純 (保健管理センター講師)

## 1. はじめに

自殺対策基本法に基づき、自殺総合対策大綱が定められ10年が経過した。様々な対策が進められており、わが国の自殺者数は減少傾向にある。しかし、15歳から39歳までの各年代の死因の第1位は自殺のままであり、若い世代の自殺が深刻な状況は続いている(厚生労働省、2016)。さて、2017年7月に自殺総合対策大綱が改正された。旧大綱からの主要な改正点かつ重点施策の1つが「子ども・若者の自殺対策を更に推進すること」である。具体的には、「学生の心の問題・成長支援に関する課題やニーズへの理解を深め、心の悩みを抱える学生等を必要な支援につなぐための教職員向けの取組の推進を図る」ことが明記された(厚生労働省、2017)。したがって、学生と接する教職員一人一人が学生の発するSOSを受け止め、有効な支援に繋げる技術の向上が大学に求められている。

ところで、わが国の学生支援は、「学生中心の大学」の理念を提唱した「大学における学生生活の充実方策について(報告)―学生の立場に立った大学づくりを目指して―」(文部科学省高等教育局、2000)および、その理念を実際の提言した「大学における学生相談体制の充実方策について」(日本学生支援機構、2007)によって大きく前進した。特に、後述した報告書は、「わが国の大学教育をめぐる現実的状况を理解しつつ、学生支援および学生相談のあるべき姿を追求した最良の設計図」(鶴田、2007)と評されているように、学生支援の全体を示す最も重要な報告書である。特筆すべきは、「学生支援の3階層モデル」<sup>1)</sup>という学生支援・学生相談体制の理論的な枠組みが示されていることである(図1)。3階層による支援と、それらの連携・協働により、大学全体の学生支援力の向上を図ることが重視されている。

さて、本学では学生指導担当教職員研修会が毎年実施されている。学生指導担当教職員研修会とは、学生指導に関する諸課題について研究討議を行うことにより、学生指導を担当する教職員相互の理解を深め、学生指導の改善・充実を図ることを目的としている。先に示した3階層の学生支援の担当教職員が集まる機会であり、本学の学生支援の縮図を表す研修会であるといえるだろう。

本年度は筆者が講師となり、「大学生の危機と自殺対策」および「学生支援における情報共有と連携」という演題で研修会を実施した。本稿では、研修後にアンケート調査を実施し、3階層モデルを意識した自殺予防研修の意義と課題について検討する。

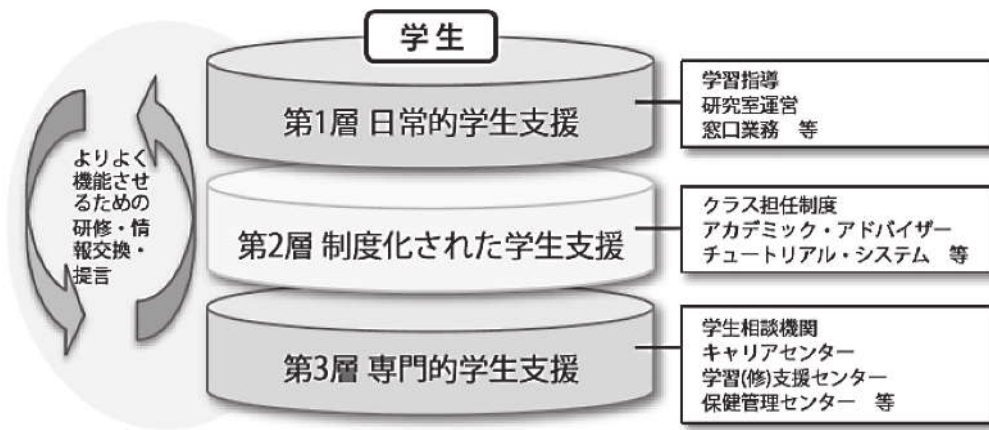


図1 学生支援の3階層モデル（日本学生支援機構、2007）

## 2. 調査方法および結果・考察

### 2-1. 調査手続き

#### (1) 研修・調査実施日

2017年9月26日。

#### (2) 調査手続き

調査は研修会終了後実施し、その場で回収した。なお、調査の目的、自由意志による回答、個人情報やプライバシーの保護など、研究上の倫理についての説明を質問紙に記載し読み上げた。調査は無記名で回答してもらい、質問紙はその場で回収した。

#### (3) 参加者・調査対象者

参加者は教務委員会委員、学生支援センター委員等の教員計22名と、学生指導担当事務職員計15名であった。質問紙は30部（教員18名、職員12名）回収した。

### 2-2. 講義「大学生の危機と自殺対策」

#### (1) 研修内容

内容は、「学生の自殺防止のためのガイドライン」（学生相談学会、2012）を参考に構成した。具体的には、大学生の自殺の現状、自殺の背景、大学生の成長と心理的危機、学生支援の3階層モデル、支援ためのキーワード（気づく・つながる・つなげる）等について解説した。また、保健管理センターの役割・機能についても紹介した。

#### (2) 調査結果

講演についての感想（初めて知った・印象に残った内容等）や意見について、自由記述で回答を求めた。結果、計22の記述が得られ、筆者がカテゴリ化した。その一部を示す。

【大学生の自殺の実態について】

- ・大学生の自殺が深刻であることを知った。
- ・学生の自殺リスク要因や現代学生の心性などは、今までぼんやり考えていたことが整理でき、有益でした。

【つなげる方法について】

- ・自殺する学生が相談にきていないということは、そのような学生に窓口の存在を知らせることができるのかを考えたい。悩んでいる人は結構いるということを伝える方法。
- ・支援の必要な学生ほど、大学からの連絡が不可欠という点について認知が強まった。
- ・学生サポートの手引きのような資料が作成されていることを知ることができ、参考にしようと思いました。
- ・気づいてはいるのですが、なかなか本人とつながることができない場合は、具体的にどのようなアプローチをとると良いか疑問です。

【学生を支援するシステムについて】

- ・学生担当となり日が浅いので、学内のフォローの体制が確認できたことがよかった。
- ・3階層モデルは重要ですが、各セクションでこれを充実させる必要があると思う。
- ・自殺は個人的な問題のみではなく、社会の問題として捉えることが重要と考えます。今回は多くの自殺リスクのある学生への対応が主となっていたが、次回は全学生へ向けての対策や啓発、学生が支援者になることも多いので、ゲートキーパーとしての学生を考えることも必要と思います。

(3) 考察

大学生の自殺の実態については、本稿で示した記述以外にも非常に深刻な問題であるという回答が得られた。研修では示さなかったが、杉岡他(2012)は「自殺したいと思ったことはありますか」という問いに対して、「ある」と回答した学生は55.2%であったと報告している。まず、大学生の自殺が身近な問題として存在するという認識をもつことが、支援や対策に向けての第一歩といえる。自殺の実態について驚きをもって受け止められたということは、本研修会に参加していない教職員の多くが実態を知らないと考えられることから、今後も継続した啓発活動が必要といえる。

必要な支援への「つなぎ」に注目した回答も複数得られている。一方、支援につなぐことの必要性を認識しつつも、またそのような学生ほど大学からの連絡が難しいという葛藤がみられた。ガイドライン(学生相談学会、2012)に示されているように、各層の担当者同士の情報共有や連携が、支援の足掛かりとなるのではないだろうか。

また、学生を支援するシステムについての記述も得られた。全ての教職員が、学内にどのような部局があり、どのような役割や機能があるか十分に理解できているとはいえない。「学内のフォロー体制が確認できた」という記述からも、学生支援の全体図を理解する一助となっていることが伺える。

ところで、「ゲートキーパーとしての学生」という回答もみられた。ゲートキーパーとは、「自殺の危険を示すサインに気づき、適切な対応（悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る）を図ることができる人」（厚生労働省、2007）を指す。確かに、学生の悩みは保護者や教職員ではなく、友人が圧倒的に多い。阪中（2008）は、友人から「死にたい」と打ち明けられたことのある中学生が20%存在すると報告している。当然、大学でも多くの学生が同様の経験しているものと考えられ、学生に対する自殺予防教育も重要な課題である。

## 2-3. 意見交換会「学生支援における情報共有と連携」

### (1) 研修内容

まず、「学生支援の3階層モデル」について説明した。次に、自殺念慮のある大学生の架空事例を題材に、各層でどのような支援が必要か、情報共有や連携を行う上で必要なポイント等について、班別討議を行った。最後に、各班の発表と質疑を行った。なお、班は学部別に、各班教務委員会委員、学生支援センター委員、学生指導担当事務職員等で構成された。

### (2) 調査結果

意見交換会についての感想や意見について、自由記述で回答を求めた。結果、計17の回答が得られた。教員と職員で内容に違いがみられたため、筆者が別々にカテゴリ化した。以下、結果の一部を示す。

#### ① 教員の感想

##### 【他学部との違いを知る】

- ・他学部の意見が具体的で参考になりました。
- ・他部局の参加者もおられたので、様々な支援のポイントがありうる事が分かって有益でした。

##### 【具体的な対応を検討する】

- ・支援の仕組みに加えて、具体的に学生個人にどのような声かけ、面談アプローチの仕方、面談内容学生の対応に対して、とってはいけない対応など考えられるとよいかと思いました。
- ・事例検討ができたので、具体的なディスカッションができてよかった。
- ・架空事例では、キャリア教育を行う必要があると感じた。

#### ② 職員の感想

##### 【他学部との違いを知る】

- ・学部の対応は学部の制度によって多少異なっていた。
- ・部局によって対応が異なることを知れてよかった。

【教員の考え方や取り組みを知る】

- ・先生方の実際の取り組みが聞けて興味深かった
- ・色々な意見を聞くことができてよかった。
- ・学生の連絡が取れないことが問題であることが共通認識できた。問題のある学生向けの授業を行うという意見が新鮮であった。
- ・先生方が葛藤してきた経験がについて共有することができ、どのような情報があれば支援しやすいか考える材料になった。

(3) 考察

分類の結果、教員は「他学部との違いを知る」・「具体的な対応を検討する」、職員は「他学部との違いを知る」・「教員の考え方や取り組みを知る」と分類された。

研修は、班別で検討してもらい、発表してもらおうという形式で行ったため、多様なアプローチを聞くこととなり、「他学部との違いを知る」機会となった。研修中、特にみられたのが、どの機関・機能がどの層に位置づくのかという位置づけの認識の違いである。筆者の各層の説明が不十分であった可能性もあるが、第2層にあるべきものが第1層（日常的な支援である）と位置づけられていたり、第3層に位置づけられるであろう機能が第2層にあるといったことがみられた。各学部で現状に沿った学生支援体制が構築されており、各部局がその機関・機能をどのように位置づけ、捉えているかが窺えた。

事例検討を行ったが、教員には「具体的な対応を検討する」機会となり、有益と受け止められたようである。本研修は、自分の守備範囲で可能な支援だけでなく、他層または外部に必要な支援も一人一人がイメージを膨らませなければならない。円滑な連携を可能にするには、それぞれの役割や機能を理解していなければ難しい。したがって、困難を抱えた学生の全体の支援を協力して考える機会となったのではないだろうか。

また、本研修会は、職員にとって「教員の考え方や取り組みを知る」機会となっていた。それだけ、普段教員がどのように考えているか、職員が知る機会は少ないのかもしれない。一つの事例を一緒に検討すること自体が、多職種の仕事や役割を理解する助けになっている可能性が考えられた。

3. おわりに

本稿の目的は、3階層モデルを意識した自殺予防研修の意義と課題について検討することであった。

現在は、「学生中心の大学」という言葉は当然のように受け止められているようである。今回紹介した3階層モデルにおいても、一番上に「学生」が置かれており、それを支える形で教職員や専門機関が置かれていることに象徴されている。今回は、喫緊の課題である自殺予防というテーマで3階層の事例検討を行ったが、他にも、事件性・引きこもり・ハ

ラスメント等、キャンパスを揺るがす対応困難例は存在する。今後も、「学生」を中心に据えた研修や啓発を継続する必要がある。

## 謝辞

研修会の座長を務めていただいた小宮一高先生、研修に参加し調査にご協力いただいた教職員の皆様に御礼申し上げます。

## 注

- 1) 第1層（日常的学生支援）とは、窓口業務、学習指導、研究室運営等を指す。第2層（制度化された学生支援）とは、クラス担任制度、なんでも相談窓口、ピア・サポート、ティーチング・アシスタント、オリエンテーションの交流等を指す。第3層（専門的 student 支援）とは、第1層・第2層のみでは対応できない学生に対する教育的・専門的支援のことであり、学生相談、進路・就職相談、ハラスメント相談、留学生相談、障害学生相談等を指す。

## 参考文献

- 学生相談学会（2012）「学生の自殺防止のためのガイドライン」（<http://www.gakuseisodan.com/wp-content/uploads/public/Guideline-20140425.pdf>）＜2017年11月4日アクセス＞
- 厚生労働省（2007）『自殺総合対策大綱—誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して—』（<http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000172203.html>）＜2017年11月4日アクセス＞
- 厚生労働省（2017）『平成29年版自殺対策白書』（<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/17/index.html>）＜2017年11月4日アクセス＞
- 日本学生支援機構（2007）「大学における学生相談体制の充実方策について—『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談の連携・協働』—」（<http://www.jasso.go.jp/gakusei/archive/jyujitsuhosaku.html>）＜2017年11月4日アクセス＞
- 阪中順子（2008）「生徒向け自殺予防プログラムの教材開発」『明治安田こころの健康財団研究助成論文集』第44号、82-91頁。
- 杉岡正典・若林紀乃（2012）「大学生を対象とした自殺予防教育に関する基礎的研究」『広島文化学園大学学芸学部紀要』第2号、9-15頁。
- 鶴田和美（2007）「日本学生相談学会から見た『学生相談体制の充実方策』」『大学と学生』第44号、14-19頁。